



ジョナサン・ベネディクトの5分で学ぶ父親業 ● その15

結婚した息子へ贈ることは

息子テモテへ

「今さら」って感じがしなくてもいいけれど、結婚おめでとう。

お母さんも僕も、君が結婚できたこと、それもイエスさまを愛する女性と結婚できたことが本当にうれしい。君が大阪にいて準備に追われ、僕たちは長野にいたから、結婚生活についてじっくり話す時はなかったね。とは言え、過去26年間、君はお父さんお母さんを見続けてきたわけだから、付け加えることは何もないとも言える。

だが、僕も結婚について学んだことはたくさんあるし、結婚した32年前の1979年から比べたら、僕自身かなり変わったのも事実だ。だから、老婆心ながら学んだことを少しまとめてみよう。

第一に、新婚1年目は妻を喜ばすことに集中すること。2番目、愛するとは耳を傾けること。3番目、競争しないで協力することだ。

■1年目は妻を喜ばすこと

これは、聖書の知恵でもある。申命記24章では、新妻をめとった男が、一年間彼女を喜ばせることに全力を尽くせと命じられている。これは大切なのに見逃ししやすい原則だ。特に我々男性は、独身時代と同じように働きつづけ、仕事中は家庭があることも忘れてしまっ。

僕も、最初の2年は板挟みだった。自分はミニストリーに向かい、お母さんは普通の家庭生活に向かう。僕は彼女に失われたたましいへの関心が少ないと感じ、彼女は僕が奉仕のブラックホールに吸い込まれているように感じていた。あの1年目は彼女の気持ちを第一にすることに集中して2人の関係を築くべきだった。ところが、2人は信頼感を失うことになり、最初の数年間、内心は結婚している気がしなかった。

でも3年目に近くのファミリー・レストランでコーヒーを飲みながらたくさんのことを話し合った。1年目にそうしなかったのは残念だけど、僕

と同じ間違いをしないようにとすることはできる。だから、君も1年目は仕事を増やさないようにして、彼女を優先し、配慮することに努めてほしい。そうすれば彼女も自分が本当に愛されていることがわかって、これからの風も乗り越えていける堅い基礎が築ける。いや、実は2年目も気持ちを大切にすることに集中しても悪くはないよ。

■愛するとは耳を傾けること

僕はこれを苦労して学んだ。君も含めて子どもが3人いた頃、帰宅する時は僕はクタクタだった。気持ちの余裕がなくて、しばらく僕を放っておいてという気持ちで帰ったものだ。しかし、玄関のドアを開ける度に、お母さんは一日たまっていたことながら後から後からしゃべりだす。僕は何も聞きたくない。一人にしてほしかった。

当然ながらお母さんは、それがおもしろくない。僕は汚れたおむつや壊れたおもちゃや子どもの病気の話に興味がない。そのうち、毎日家に帰ることを考えただけでストレスを感じるようになってきた。正直言って、帰りたくない時もあった。

でも、神さまは妻の必要に応える知恵を僕に下さった。僕が帰宅して妻を避け、うちにこもってしまうのではなく、彼女にしっかり注意を向けて話を聞くまでは、一日の仕事が終わっていないんだと、神さまは教えてくださった。お母さんの話を僕が聞くようになったら、不思議なことが起こった。ストレスがなくなり、かえって幼児の面倒を見てくれる彼女に対する感謝が湧いてきたんだ。お昼時に家に電話をして、話を聞くこともあったよ。だから、君も他のことを頭から追い出して妻の話を聞き、心の重荷を降ろさせてあげるといい。特に、幼児がいる時にはきつと感謝されると思っよ。

■競争しないで協力すること

結婚したばかりの頃、僕は自分が主人なんだか

ら、お金の使い方をはじめ自分が何でも決めなければと考えていた。

しかし、やはりこれは問題の元になった。何より、僕は予算を立てることについて何も知らず、僕のお金の使い方はお母さんを悩ませ、すぐにお金がなくなるのではないかと心配させてしまった。

僕の長所は、残念だけとお金の扱いはなかった。次第に、彼女のほうがお金については強いことがわかった。妻を自分に対する脅威に感じるのではなく、協力すべきチームメイトだと見られるようになった。自分のプライドを飲み込んで、結婚生活での彼女のすばらしい能力を發揮してもらうことにした。協力することを学ぶと、お金に関する不信感や行き違いはなくなった。

同じように、君も彼女の長所を見つけて受け入れ、家庭生活で活かすように励ましてごらん。きっとケンカが減るはずだよ。

これが何かの助けになるといいと思う。神さまの祝福を祈っています。

愛をこめて 父より



2011年5月結婚
テモテさんと真美子さん



文|| ジョナサン・ベネディクト
1966年山口県岩国市生まれ。
宣教師2世。
四男六女がいる。長野県在住。
清泉女学院大学講師。
著書「ふたりのために」